

母乳栄養に関する疫学的研究

分担研究者	平山宗宏	(東京大学母子保健)
	山内逸郎	(国立岡山病院)
研究協力者	前田和甫	(東京大学疫学)
	畠山富而	(岩手医大小児科)
	高野陽	(国立公衆衛生院)
	南部春生	(北海道社保中央病院)
	橋本武夫	(聖マリア病院)
調査協力者	五十嵐郁子	(国立岡山病院)
	石井朗夫	(日野市立総合病院)
	斉藤実	(東京大学母子保健)
	庄司淳一	(日光総合病院)
	中江公裕	(東京大疫学)
	野末悦子	(川崎市久地診療所)
	日暮真	(東京大学母子保健)
	藤井とし	(都立築地産院)
	堀口貞夫	(//)
	村瀬溥太郎	(沼津市立病院)
	米山国義	(八王子市米山病院)
	渡辺言夫	(杏林大学小児科)

研究の目的：

母乳栄養の意義については、栄養学的、感染防禦、心理学的、内分泌学的等多方面から利点があるが、推計学上の評価にたえる科学的研究資料はとほしい現状である。

そこで母乳の意義を、発育および罹患状況の二面から計画的に立案された疫学的手法を用いて検討することを目的として研究を実施した。なお発育に関する部分については発育研究班（高石昌弘班員）においてとりまとめを行なうこととし、協同研究を実施した。

研究の方法：

本研究グループにおいて作製した乳児発育調査表（昭和50年度報告書に添付）の各事項についての調査を協同して行ない、東大疫学教室において集計を担当することとした。集計には東大大型計算機センターを利用した。

調査対象：

查協力施設において出生し、また収容された児を生後12カ月間追跡する。周産期に明らかな異常のあったもの、低体重出生児は除外することとした。対象児はその施設において原則として毎月齢ごとに健康診査を行ない、身体計測、身体所見、精神運動機能発達状況、栄養法、罹患状況を調べる。また発育および罹患の季節変動を考慮に入れて、全季節を通じて対象をほぼ同数選択することとした。

研究成績：

本調査は表1に示すとおり、北海道から岡山迄の各地の病院・産院（うち、東京都内3ヶ所）で、昭和50年10月～51年9月迄の1ヶ年間に出生した児を栄養法別、毎月健診に訪ねる機会に観察した結果を調査票に記入して回収・集計したもので、目下継続中である。したがって今回の報告は、52年1月中に回収出来た767例についての中間報告である。

表1 母乳疫学調査の概要

目的：栄養法別の環境・罹患状況調査
方法：昭和50年10月～51年9月の出生児1年間追跡調査
全国13施設 統一調査表 一括集計
中間集計：回収数 767
出生時、新生児期異常除外
↓
集計に使用 592

回収されたが集計から除外した新生児期の異常の内容は、在胎36週以上の早産児、出生時体重2,500g未満、Apgar 7以下、切迫仮死で生れたもの、先天奇形をもったもの等であり、それに多胎児は除外した。

その結果、集計対象は表示のように592例である。そのうち、さらに26例は栄養法についての記入が不備であったので除外し、出生後1カ月迄の栄養法を、母乳のみのもの、大部分母乳であるが人工乳を少し加えたもの、両者が等しいもの、大部分人工乳であるが、努力して母乳も吞ませているもの、全く母乳を与えられず、人工乳のみの5群にわけ、対象児のバックグラウンド関係事項等を聴取した結果表2に示す。

表2 母乳疫学中間集計

生後1月までの栄養法	母乳のみ	母 > 人	母 = 人	母 < 人	人工のみ
調 査 例 数	331	62	69	44	60
母乳促進処置実施	55.9%	78.0	72.3	74.4	47.5
父：短大 大学卒	41.9	48.2	46.3	36.3	36.2
母： " "	23.6	23.2	22.4	25.0	14.0
分娩後すこぶる好調	70.7	79.0	68.1	65.9	56.7
住居：一 戸 建	44.9	48.1	42.6	56.1	49.0
：自 宅	31.0	37.5	36.0	43.2	42.1
：社宅・官舎	11.3	12.5	8.0	8.1	5.3
：居室3室以下	70.4	72.6	86.0	57.5	58.4

調査対象施設では積極的に母乳栄養をすすめるように指導することに申合わせていた理由もあるので、混合栄養児では、母乳が出るように処置を施された例が皆高率の結果になっている。

その他の項目については、ほとんど差はなく、対象児の育児環境は略同等であると考えている。

観察内容は図1～3に示すとおり6項目であり、3ヶ月および5ヶ月迄の図は、出生後それぞれの月迄の累計である。

止むを得ない事であるが、出生後日を経るに従い、健診来院者は減少してくるので、図では観察内容を全て%で示した。

図から明らかなどくとく、例えば湿疹の有無は1ヶ月迄は両者はほとんど同じであるが、5ヶ月になると人工栄養児が多くなっており、“熱の出ない病気の罹患”を除いて、他は全て5ヶ月時では人工栄養児の方に頻度が高い傾向である。5ヶ月迄の観察で“熱の出た病気”の頻度が、人工栄養児に有意に高い結果が得られたが、いまだ対象数が多くないので、結論は差し控えたい。

(注) 熱の出た病気 URI, LRI, Subitum, 下痢, 風疹, 水痘等。

熱の出ない病気 URI, LRI, 結膜炎, 驚口瘡, 下痢。

図1 1カ月までの栄養法別罹患状況

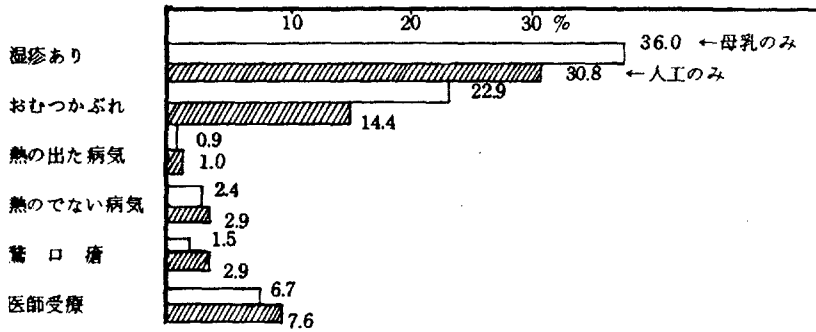


図2 3か月までの栄養法別罹患状況

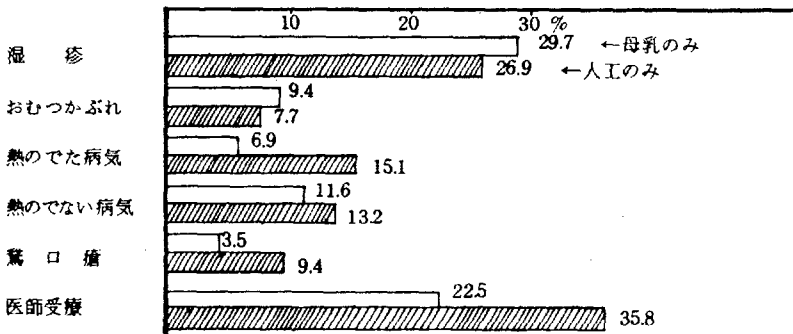
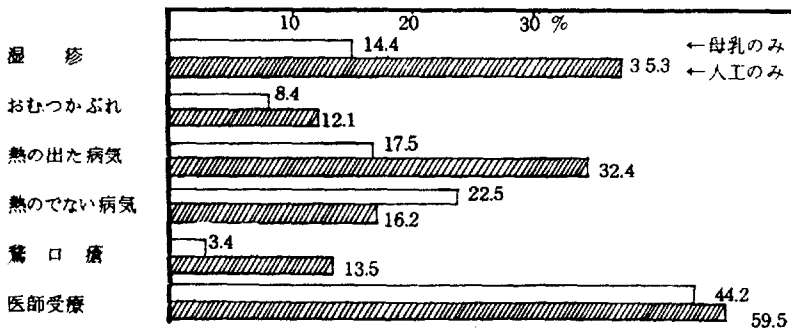


図3 5か月までの栄養法別罹患状況



今後の研究の予定：

本研究は、1年間に出生した対象児を1年間追跡する予定でスタートしているので、現在その研究計画の半ばをおえたところであり、調査対象数もまだ不十分である。明年度さらに1年間の追跡調査を実施し、その結果を集計して結論を出すことにより、目的とするところを遂行しうる予定である。

↓
検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります
↓

研究の目的:

母乳栄養の意義については、栄養学的、感染防禦、心理学的、内分泌学的等多方面から利点があげられているが、推計学上の評価にたえる科学的研究資料はとぼしい現状である。

そこで母乳の意義を、発育および罹患状況の二面から計画的に立案された疫学的手法を用いて検討することを目的として研究を実施した。なお発育に関する部分については発育研究班(高石昌弘班員)においてとりまとめを行なうこととし、協同研究を実施した。